

霧島ジオパーク 世界ジオパーク国内候補地審査 現地審査報告書

平成 25 年 7 月 28 日（日）～29 日（月）

中田節也（東京大学・JGC 委員） 柚洞一央（室戸ジオパーク・地理専門員）

鵜飼宏明（天草御所浦ジオパーク・学芸員）

現地対応者（所属）

前田終止（推進連絡協議会会長・霧島市長） 池田宜永（推進連絡協議会副会長・都城市市長） 高妻経信（高原町統括主監） 西川和孝（小林市副市長） 酒匂重久（えびの市副市長） 岩元祐昭（曾於市課長） 児玉州男（宮崎県北諸県農林振興局局長） 三好亨二（宮崎県西諸県農林振興局局長） 陶山修（鹿児島県始良・伊佐地域振興局局長） 川畑洋一（鹿児島県大隅地域振興局部長） 川崎雅彦（都城市商工部商業観光課課長） 大崎直樹（都城市商工部商業観光課副主幹） 恒吉和昭（都城市商工部商業観光課企画部秘書広報課副課長） 六部一智久（高原町まちづくり推進課主任主事） 柚木脇大輔（小林市企画政策課主査） 坂口優紀（えびの市企画課主事） 上拾石賢吾（曾於市企画課主任） 米村文明（北諸県農林振興局総務課副主幹） 山台修一（西諸県農林振興局総務課主幹） 内藤栄俊（始良・伊佐地域振興局総務企画課主査） 増山久志（大隅地域振興局総務企画課専門員） 山下栄次（宮崎県総合政策部中山間・地域政策課主幹） 西原学（宮崎県総合政策部中山間・地域政策課主幹主査） 玉利雅昭（鹿児島県企画部地域政策課係長） 久保一真（鹿児島県企画部地域政策課主査） 岩松暉（推進連絡協議会顧問・鹿児島大学名誉教授） 井村隆介（推進連絡協議会顧問・鹿児島大学大学院理工学研究科准教授） 萬徳茂樹（連絡協議会事務局長・霧島市商工観光部部長） 坂之上浩幸，中村光彦，池田圭介，窪田宗摩，石川徹（霧島市商工観光部霧島ジオパーク推進課） 中堀清哲（霧島市観光協会副会長・観光協会ジオパーク委員長） 松元繁明（桂内地区自治公民館長） 窪田功司（霧島市霧島在住） 原口憲太郎（ジオガイドネットワーク代表） 谷山天一（NPO法人たかはるハートム代表） 永友康久（宮崎県御池青少年自然の家所長） 谷口俊一（宮崎県御池青少年自然の家副所長） 吉川（曾於市観光特産開発センター所長） 岩元（株式会社都城印刷） 関之尾むかえびと（ガイド団体） 吉元鈴代（鹿児島県立霧島自然ふれあいセンター所長） 森川政人（環境省自然保護官） 柳田蓉子（解説員：自然公園財団所属） 満田宗雄（えびの高原エコミュージアムセンター所長） 白池図，奥村健一郎，古園俊男，樋口信義（霧島ジオガイドネットワーク・霧島ジオガイド養成講座アドバイザー） 前田宗佐，上園信一，永友武治（ジオガイド） 町元華奈（株式会社えびのびより） 西田健（えびの市観光協会事務局長） 山元保，大漉あゆみ，鶴重光葉（陵南中学校） 平國弘明（霧島市教育委員会） 高田肥文（霧島市教育長） ほか

見学地点：霧島市観光案内所，神話の里，高千穂河原，霧島神宮古宮址，御池，御池青少年自然の家，関之尾滝，三連轟，桐原の滝，霧島ふれあい自然センター，えびのエコミュージアム，道の駅えびの，陵南中学校ほか

現地審査のまとめ

霧島ジオパークは日本ジオパークに2010年に認定されて以来、グッズ販売などの地域の活動、一部企業との連携、ジオパークが学校カリキュラムに取り入れられたこと、拠点施設が整備されたこと等、この2年半で魅力ある素晴らしいジオパークに育ってきた。特に、2011年1月末からの新燃岳噴火に際しては、ジオパーク推進協議会が中心となって、ハザードマップの作成や噴火災害対策に取り組んだことにより、関係市町の連携が深まったことは大きく評価される。また、構成自治体や鹿児島・宮崎県の出先機関長からは、ジオパークを推進したいとの意気込みがそれぞれ語られるようになってきた。その一方で、カルデラと霧島山の関係や、火山と人間の歴史・文化とを絡めたストーリー作りが遅れており、ジオガイドや説明看板の内容にも不十分さがある。協議会の下での役割分担や情報を共有する体制がまだ整理されておらず、協議会と実行部隊の環霧島活性化会議、さらには関連自治体全体や観光関連施設とまだ上手く連携していないように見受けられる。GGNメンバーに求められる世界への貢献という点でも、該当するような実績が十分に見られない。

1) ジオサイトと保全

ジオサイトの多くは霧島国立公園や県立公園内に所在しており、法的保全がなされている。また登山客のマナー低下による登山道荒廃や公園内外の清掃活動などの活動は、協議会会員であるガイドクラブや環境省、登山道管理者が連携して実施しており、一定程度評価できる。ジオサイトについては、私有地をジオサイトにしない見解を取っている。しかし、この点については、ジオストーリーとの兼ね合いを考え、私有地であってもジオサイトにするよう改善が望まれる。

2) 教育・研究活動

霧島ジオパークを構成する5市1町の教育委員会が、副読本「ふるさとの山霧島山」を作成し、理科や社会科での活用を実施している。また、霧島市教育委員会では、すべての小学校にジオパークコーナーを設置し、いつでも気軽にジオパークを学べる環境づくりを推進している。研究活動については、該当地区に専門の研究機関は存在しない。しかし、今年度、霧島市ではジオパーク担当の専門職員(火山地質学)を市の正規職員として新規採用している。今後、霧島ジオパークをフィールドにした調査研究の推進が望まれる。

3) 管理組織・運営体制

主にソフト事業を行う霧島ジオパーク推進連絡協議会は、首長や議長、鹿児島・宮崎両県の振興局長などが会員になっており、協議会としての意気込みは感じられる。また、ジオパークの活用を担う地域コミュニティーとして、民間有志などによる霧島ジオパーク活性化会議があるが、一部の構成員によって運営されている印象がある。今後は、よりたくさんの地域住民の参画を模索するとともに、霧島ジオパークにかかわる全ての構成員で情報を共有し、みんなで考えることが必要である。また、文化的な素材の活用が遅れており、人文社会科学を専門とした研究者の参画などを通して、ジオストーリーを再考することが望ましい。

4) 地域の持続的発展とジオツーリズム

ジオツーリズムの拠点となるであろう「えびのエコミュージアムセンター」の積極的な活用に課題が残る。霧島ジオパークを目的に来た旅行者を、まずこの施設に誘導する情報発信が必要である。また、ミュージアムセンターへの公共交通機関が未発達である。気軽に訪れることができるよう整備が必要である。ジオツアーは、山麓コースとして5つ、山岳コースとして8つが設定されているが、いずれもジオストーリーが不明確である。ジオサイトをただ羅列したものではなく、個々のコースで何を感じてほしいのかメッセージを明確にする必要がある。また、地域の持続的発展を実現するためにも、地域コミュニティーの強化と維持に貢献してきた民俗芸能や、食など、環霧島地域ならではの独自の文化や特産品をジオパークと連携させてより積極的に活用する工夫が必要である。

5) 国際対応及びネットワーク活動

国際対応としては、英語版のパンフレット作成やジオサイト看板への英語表記などが実施されているが、今後実際に外国人客が来た時の具体的な対応を整備していく必要がある。また、ネットワークへ活動としては、第5回ジオパーク国際ユネスコ会議（島原半島）に、63名もの参加をしていることは評価できるが、今後は、GGNメンバーに認定されることを見越して、世界のGGNメンバーとパートナーシップ、姉妹提携を視野に入れた、より積極的な活動が必要である。また火山をテーマにしたジオパーク同士で連携を深めるなど、テーマ性のあるネットワーク活動なども検討すべきである。

6) 防災・安全

2011年の新燃岳噴火に際して、ジオパーク推進協議会が中心となって、ハザードマップの作成や噴火災害対策に取り組んだことは高く評価できる。今後は、今回の噴火体験をどうジオパークとして活用していくかが焦点となる。その際、霧島の火山の特徴を踏まえた説明が必要である。世界の火山との比較なども取り入れながら、広く火山について知識を提供し、霧島がどのような火山なのかをわかりやすく伝える必要がある。それらの活動を通して、これから霧島火山とどのように共存していくのかを地域住民と考えてほしい。